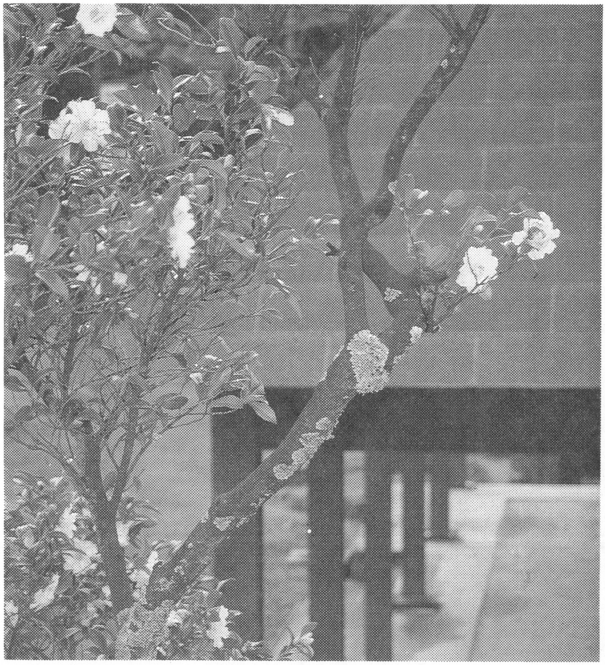


妙の光（たえのひかり）

通刊36号 復刊11号
1994年3月8日（季刊）
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜
〒953 ☎0256-77-2025

サザンカ

冬の境内で花を見せてくれるのが寒桜とこのサザンカ。現在の新しい客殿で中庭が石の庭になったが、以前の中庭は池を中心にして樹木が植えられ、四季を通じて花の絶えることがなかった。その花の代表が寒桜と夏のノウゼンカヅラ、秋のヤツデに冬のこのサザンカだった。

当時赤い花と白い花の二本の木があり、秋から冬の間紅白で中庭を色どっていた。昭和五十六年の客殿建替え工事で、現在の正面玄関脇に移植したが、赤い花の木の方が枯れてしまい、現在のこの白い花の木が残った。大木という程ではないが、それでも七十年以上はゆうに経ている。近頃、咲く花の数が多くなったように思えるが、そうだとすれば木が弱っているせいだとある人は言った。それは種を保存しようとする生物の本能のようなものとか。

「山茶花」と書かれることがあるが、専門的にはこの字は椿の名前のことで間違いだという。椿の仲間ではあるそうで、冬から春にかけて境内では野生の椿とともに印象深い木である。

彼岸に至る心

小川英爾

ある日の昼下がり、見る気もなくついていたテレビのワイドショーの中で、人生相談が始った。相談者は六十八才の女性。息子からの、老後の世話をするからとの申し出で、夫の遺した土地を処分した三千万円を出して、協同で息子夫婦との同居の家を新築した。同居の生活はうまくいっていたが、まもなく息子が舌癌で急逝。四十九日忌を過ぎたばかりというのに、息子の嫁が突然、土地も家も私名義になっているので、これを担保に借金して商売を始めたい。ついては元々は他人の義母に出て行ってもらいたいと言われている、という相談の内容である。

なんと非人情な嫁か、とは誰しも思うところだが、いかにも関西のテレビ局らしく、回答者がミヤコ蝶々を代表に、気さくな感じの男性弁護士、若手の落語家、そして五十過ぎの僧侶。この人達がどう答えるのか興味を覚え、見入ってしまった。

若い落語家は、人情のない嫁ハンではあるが、三十才そこそこの嫁ハンの齢と幼ない二人の子供のことを考えれば、先々のこともあるから嫁ハンの気持ちもわからんではない。僧侶は、似たような話は前にもあった。夫婦だって元は他人同志なんだから嫁も姑も親子と同じだ。姑にとっては孫と血がかよっているんだ。その親を放り出そうというような嫁は人間とは言えない。こういう女性が増えたのは世の中が悪いせいだ。

これに対して弁護士は、法律上親子関係は血族と姻族の二種類あって、嫁と姑は姻族に当る。この場合は申請するだけで親子関係は解消する。この件で言えば、姑が扶養してもらうことを条件に三千万円という金を出したのだから、嫁が扶養しないというのなら、返してもらうよう法律的な手続きを早く取った方がいい。

三人三様の回答が余談も混じえて話されたが、今一つすっきりしない。最後にミヤコ蝶々がこうまとめた。四十九日忌が過ぎたばかりで義母を追い出そうなど、本当に非人情な嫁ハンだ。こんな風潮の世の中になったのは政治

家と坊さんがしっかりしないからだ。でも今そんなこと言っても問題は解決しない。残念だけれども弁護士さんの言うように、早くお金の方で解決しなさい。でも嫁ハンや世の中を恨んではだめ。つらいだろうけれど頑張って。一人一人が自分の回わりから良くしていかないと、世の中良くならない。

もちろん嫁の側の言い分、話しの切り出し方、高齢の姑の立場、孫のこと等々いろいろ考えるべき点は多い。事前にそれぞれの回答者が言う事を打ち合わせしたのか、落語家は嫁の立場で、僧侶は人情論で、弁護士は法律上の立場で発言した。それらを受けて、ミヤコ蝶々が相談者の姑にさとすように回答した。この組み合せは絶妙であった。

実はこのミヤコ蝶々の回答は、仏教の「彼岸への心」そのものである。春秋二回のあのお彼岸のこと。彼岸とは昼と夜の長さが同じ、そのどちらにも片寄らないことに因んで、片寄りのない心で、陽気のいいこの季節に仏教の修行に励みましょうというもの。つらいこと、いやなことの多い私達のこの日常がこちらの岸という此岸(しがん)から、幸せあふれる向う岸である彼岸へ、修行という河を渡っていくために、六通りの実践をすることを教えている、言わば譬え話である。お彼岸のお墓参りもその修行の一つであって、肝心なことはその六通りのお教えを知り、実践することである。

人生相談の姑に回答したミヤコ蝶々の話に則して言えば、息子を失い嫁に出されるというつらい状況に合っても、この悲しみ、苦しみを耐え忍び(忍辱・にんにく)。心を取り乱すことなく深く考えて(禅定・ぜんじょう)、仏教の教えを尊び、それに則して正しい考え、判断(智慧・ちえ)のもとで決断すること。そしてそのとき他者を恨むことなく寛容の気持ちで接し(布施・ふせ)、残されたお金を正しく有効に使って(持戒・じかい)、最後まで人間として何事にも怠ることなく励む人生を送ること(精進)を言った。

僧侶も混じえた四人の回答者の相談の上での結論だろうが、ミヤコ蝶々の話し方も良かった。厳しくてもつらくても、事の解決を前向きにはかり、人生をより豊かにするためにこうした修行は欠かすことができない。幸せな日々にあっても改めて考え直すのがこの一週間であり、皆が実行できたときに彼の幸せの岸が、誰にとっても現実のものとなる。

信心

寒空の下での「除夜の鐘」世話係

巻　夏目　保さん（42才）

大晦日の除夜の鐘にはいつも二百人近い人達が集まり、ピーク時には三十～四十人の順番待ちの行列ができる。寒空の鐘の下で鐘の調整をし、何番目かを伝えて縁起物を渡したりと、集った人達のお世話をしてくれる夏目さん。

きっかけは四年前の数え歳四十歳の暮れ、来年が前厄の年だからお寺に二年参りして何か手伝おうと考えたことによる。以来本厄、後厄と三年続けてきた。「お酒の好きな人なら大晦日の夕食後、車を運転してお寺まで来てというのは大変だろうが、幸か不幸か酒は飲まないからちょうどいい」と。

十歳の頃まで家が縄工場を営んでいたが、母方の実家の借財を背負い、さらに父が交通事故を機に不自由な体となって一挙に生活が苦しくなった。そこで姉が理容学校に進み、免許得たのを機に現在の他に理髪店を開業、さらに母が近くの飲食店で皿洗いをして暮らした。夏目さん自身も中学を卒業すると新潟市内の理髪店に弟子入り、そこから理容学校に通い、二十歳で年が明けると家に戻った。

半年後一歳年上で美容師の現在の奥さんと結婚、一男一女をもうけた。その長男が高卒後夏目さんと同様、他の店に住み込んで理容学校を終え、この六月の国家試験を目指している。後継者もりっぱに育ったが、「一人前になるには最低五、六年かかる。その後も技術のいるこの仕事は一生涯の修行だと思っている」という。真面目で研究熱心、人当りのいい性格で奥さんと二人のお店に常連客が多く、忙しい毎日。それでも趣味で飼う小型アイヌ犬の散歩と、パチンコは欠かさない。

「除夜の鐘の手伝いはいろいろわかって楽しい。一時間以上撞き続けていると鐘が熱を持ってくるように感じられる。大概は女性の方がいい音を出す。力まかせに撞けばいいというものではないね。不思議なことは、同じ力で撞いても鐘がブラブラ揺れる時と、全く揺れない時があること。なんと言っても撞き終えた人が晴ればれした顔で帰っていくのがうれしい。早い時間から天気が良ければもっともっとたくさんの人が来てくれるだろう。これからも義兄の応援をもらって続けたい。」と言う。

寺の動き

修行僧が常住します

二月中旬から妙光寺に、研修のための修行僧が常住しました。鎌田義明（かまだよしあき）、昭和四十五年生れの二十四歳。秋田県昭和町で板金業を営む鎌田義春さんの長男です。家業の板金業は現在弟が継いでいます。

信仰熱心な両親の勧めと本人の希望もあり、中学生の頃より夏、冬の休みに妙光寺に来てお経を習ったりしてきました。高校二年生の十月に妙光寺本堂で得度、以来本格的に僧侶への道を歩むべく、立正大学仏教学部の夜間部に入学、昼間は東京の住み込み先のお寺で研修していました。

しかし大学に四年間在籍したものの途中で挫折してしまい、中退して一般会社に就職しました。そこで一年間勤めましたが、僧侶への思い止みがたく、一からやり直したいとの本人の申し出で、この度修行僧として受け入れることにしました。

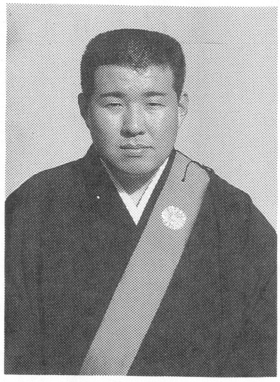
今後当面は妙光寺の雑務を手伝いながら、教学の勉強、お経、書道、華道といった研修を続けます。そして秋に身延山で行なわれる講習、試験を受け、合格すればお経の試験を経て、来春身延山での信行道場に入ります。ここを終えて始めて僧侶としての最低限の資格を得ることになります。

それまでの一年余りは研修中でもありますので、法事等には連れず、墓経、お盆の棚経、お講、枕経等に限定させていただきます。檀家のお宅を覚えるために使いには出しますので宜しくお願いします。

本人は高校時代重量挙げをやっていたそうで、体は大きく体力には自信がありますが、何分にも不慣れです。私自身小さい頃より檀家の方々に、優しく時には厳しく教えてもらいました。どうぞ同じように育てて下さい。呼び方はまだ一人前の僧侶ではありませんので、名前で鎌田君、鎌田さんでけっこうです。

その昔妙光寺には常時四、五人の役僧がいたそうです。もうそんな時代ではありませんが、やれば仕事は限りなくあります。本人にとっても大変でしょうが、こちらも勉強させられます。頑張ってもらいたいものです。

（小川記）



安穏廟の反響続く

安穏廟も開設以来この夏で丸五年を迎えます。この間類似の永代供養墓が全国に増えていますが、順調な運営を続けているのは、他に京都で「女の碑の会の志縁廟」と、東京で「もやいの碑」の三ヵ所だけだそうです。

散骨が近頃の話題となっていますが、今のところ実際の希望者はさほど多くなく、むしろ集合墓、合祀墓への希望が多いとか。東京都が墓地不足もあって、積極的に取り組んでおり、先頃都営多摩霊園にドーム型集合墓を建設しました。そして次に都下青梅市に合祀墓を作る構想を先日発表しました。そのために安穏廟を視察したいとの連絡があり、三月十七日に担当者が来寺されます。神戸市も二月に来られ、都合三回になりました。しかし行政の場合、供養の形、宗教性、精神的な部分をどうするかの大きな問題となります。

今年は国連で決めた国際家族年とか。これに因んで地元誌新潟日報が通年企画の第一段として、墓と家族をテーマに、一月三日から十回連続で安穏廟を取り上げました。これに対して五十数通という近来にない反響が読者からあったそうで、それをさらに二回に別けて掲載しました。取材にご協力いただきました方々に御礼申し上げます。

この反響が掲載された頃、NHKテレビの朝の番組「くらしのジャーナル」で、これで二回目ですが放送されました。取材に三日かけて放映は三分程でしたが、他にも昨年暮にサンケイ新聞に出、ご三月共同通信から全国の地方新聞に流されて掲載されます。こうしたことで県内外からの問い合せ、申し込みが続いています。また住職が二月に宮城県日蓮宗青年会の市民公開講座で、三月山形県看護協会の総会で講演依頼されるなど、安穏廟の社会的意義を実感しています。

一連の報道もあって、八月のフェスティバルへの参加希望の声も増えています。今年は今のところ八月二十七、八日を予定しておりますが、決まり次第お知らせします。この春のお彼岸へもお参り下さい。詳しくは八ページのご案内で。

ご自身や関係者のもしもの時の葬儀のことで心配しておいでの方が多いようです。妙光寺に依頼するしないは別にして、ご相談はお気軽にどうぞ。

二の廟外側の区画の建設に着手、七月末完成予定です。

寺庭から

早春雑感

お正月が終わると、妙光寺は一年中で一番暇な季節がやって来ます。特に今年のように、雪が降ってあたり一面真っ白になると、人の出入りも途絶えてしまいます。いつも静かなお寺は雪のせいでいっそう怖いくらいしーんと静まり返っています。

囲炉裏をかこんで雪見酒、しんみりと語り合ったり、なにもしないでただ炭火を見つめているのもいいかもしれない。私はこの時期、なんと言っても昼寝と読書です。炬燵にごろんと横になる午後のひとときは最高です。のんびりさせてもらいました。お腹の贅肉が増してしまったのが辛いのですが、体力、気力ともに「エネルギーの充電」「パワーアップ」といった感じです。

三月に入り、なんとなく明るくなって春めいてくると、シーズンインです。団体参拝の問い合わせ、お祓いや地鎮祭の申し込みなどで電話も鳴りだします。そういえばもうそろそろお彼岸ですよね。庭の植物もいっせいに芽吹いたり、気温が上がってくると新しい力がわいてくるような気がします。

昨日はお寺に営業の仕事でちょくちょく見えていたKさんが転勤の挨拶に来られました。私の実家の両親と同郷で何となく親しくなり、仕事以外の話もよくしました。彼は「心のオアシス妙光寺」と言うのが口癖で、「またあ、口がうまいね」と笑っていたのですが、この日「ホント妙光寺にくるとほっと出来ました」と言って去って行きました。

これから始まる妙光寺の一年を考えた時、本堂やお墓のお参りだけではなく、なんだかわからないけれどほっとできる場所、元気が出てくる場所、毎日の生活の中で、いたたまれなくなった時、どこかでそっと休みたくなった時にやって来たい場所、そんなお寺だったらいいなあ、と思います。

うちの子供たちは今遊びざかりです。自然の豊富なお寺に住まわせてもらっているおかげで、それぞれの友だちがやって来て多い時には十人にもなり、元気な歓声が境内から聞こえてきます。

賑やかに人々が集ったり、しめやかな祈りの場としてのお寺。「心のオアシス妙光寺」本当に皆さんにそう思ってもらえれば嬉しいのですが。

（小川なぎさ）

行事案内

三月二十一日(月)
春のお彼岸中日法要

10時半　安穏廟法要
11時　春季彼岸会法要
12時　おとき
1時　説教(山主)

客殿を上がり、広間に受付帳場があります。檀家の方、安穏廟の方、信者の方、それぞれのお友達等々、どなたでも自由にお参りいただき、おときについていただくことができます。ご遠慮なくご不明の点はお尋ね下さい。時間の都合でお墓参りだけでお帰りの方も、本堂へのお参りをお忘れなく。

お墓参りの際、お供え物のビニール、アルミ缶、ガラスコップ類は必ずお下げしてお持ち下さい。放置されますと、風で飛んだり割れたりして処理に大変困ります。

岩屋七面様にのぼり旗奉納下さった方々、ありがとうございました。今年分五十本をお彼岸から立てさせていただきます。これは一本二千円で奉納いただき、毎年更新しています。また毎年本堂前に、巻町和田喜作さんがお題目ののぼりを奉納下さってます。

四月二十七日・八日(水・木)
ご妙判ご開帳大会(ごはんさま)

27日午後4時説教開始、同8時稚児音楽逮夜大法要、同9時山主説教、同10時施餓鬼法要、0時通夜説教(28日朝まで)

28日午前10時半御妙判奉迎法要、12時御妙判御開帳

右の日程で進行します。こちらもどなたでもお参りできますので、お忙しい方は27日夜だけでもお出かけ下さい。

法要出仕の稚児が十名定員のところ、現在三名の申し込みです。小学校入学前くらいの年令が目安として適当です。檀家に限りません。どなたでもご希望の方は早目にご連絡下さい。

今年の年番は曽根、升潟組です。平日の上農作業の忙しくなる時期で恐縮ですが、よろしくお願いいたします。角田地区の方々には前日ののぼり立て、28日のおこし担ぎお願いします。

あとがき

早目に準備して十二月早々にはお届けする……、と前の号で公言しながら今頃になってしまいました。申し訳ございません。

おときの席の料理屋の女将さんから「読ませてもらいましたよ、とってもいいですね」と言われたり、娘の通う小学校の担任の先生から言われたりと、意外な所で意外な人に小誌の感想を耳にしてその広がりに驚いています。印刷物の溢れる世の中で、お友達の方にまで見せて下さっている方がおられるかと思うと、嬉しさ半分プレッシャー半分です。ですからついつい書くのが遅れ遅れになると言い訳を……。

人手が増えたのですが、自分で心がけないと仕事はちっとも楽になりませんね。

(小川　記)